

アジアセーリング（ASA）連盟年次総会（AGM）への参加報告

2015年11月10日

国際委員会

荒川博人、柴沼克己

AA. 日時・場所

2015年11月6日（金）午前9—12時：Youth & Development Committee

Event Committee

午後4—7時：Annual General Meeting(AGM)

中国 海南島 三亜、@Kempinski Hotel

BB. 議事概要

1. Youth & Development Committee

(1) 出席：Malav Shroff 会長、AR Arshad 委員長、Robert Tan 副会長、他の幹部、シンガポール、タイ、香港、韓国、台湾、マカオ、日本の代表

(2) 主要論点

- ・ アジアにおけるレース運営に於いてアジア人のROの数が少なく、今後の Youth の発展のためにもその数を増加させることが望ましい。この背景は試験を英語で行っていることに起因する。昨年仁川におけるアジア大会ではロシア人のROが任命されたが、今後はこのようなことがないようにしたい。そのためにはITOの前段階としての、例えばAsian Technical Official(ATO)などを創設し、実績を積ませるなどの対応が必要であるとの方向性が示された。ITOライセンスの更新の時にも、その実績が問われることとなっているので、良循環を作り出していきたいとの発言もあった。

今後のインドネシアにおけるアジア大会などではアジア人のRO数を増加させたいし、2020年の東京オリンピック時には、25%程度のROをアジアから出す目標を掲げようとのMalav会長の発言があった。

- ・ 日本から、スポーツフォートゥモロー(SFT)についての説明と映像を流した。参加者からは大きな反響と評価の声があった。その結果、AGMにおいても映像を流すこととなった。就中、香港からは、“このようにレースを含めた総合的なトレーニングの機会は重要であり、来年6月には日本の江ノ島にチームを派遣する予定であるので、ぜひこのようなトレーニングの機会を与えて欲しい。渡航費用は香港が負担するので、艇のチャーター、講義／コーチング、レースへの参加などをお願いしたい。またレーザーも対象になると有難い”。韓国からは、“毎年

韓国はヨーロッパに長期間トレーニングに派遣しているが、日本は近いしこのようなトレーニングの機会を得られれば有難い”との反応があった。また、Tan 副会長からはS F Tの実施要領のようなものがあるのかとの質問もあった。

- ・ シンガポール (Joe Chan) からは、来年2月2日から4日までシンガポールにて「ISAF Development Symposium 2016」の開催につき紹介と各国への参加要請があった。これは2012年から毎年実施されており、Youth and Development Committee 及び Coaching Network が中心になって開催され、経験の共有などを通じてセーリングの発展を目指している由。
- ・ マカオからは、初の参加でまだセーリング人口も少ないが積極的にA S A Fに参加し、今後責任を課たしていきたい、また来年には香港・中国の間の橋も完成するのでより交通の便が良くなるとの発言があった。

2. イベント委員会

- ・ 2015年に開催されたASAF ユースセーリングカップ (YSC) とASAF セーリングカップ (SC) の報告があった。700人以上の選手と17か国が参加した。
 - ・ 下記別表のとおり、日程が示された。これらの大会は、2017年にはYSCは4大会から5大会へ、SCは3大会から4大会へ、また新たに創設されるASAF Cup キールボートレガッタは2大会から3大会へと増やすとの計画が表明された。
 - ・ “ASAF アジア選手権 2016” (2016/3/7-13・アブダビ) は、レーザー、レーザ
-
- ー
ラジアル、49er、RS:X (男女) は2016年リオ・オリンピックの国別選考大会となっている。
- ・ ASAF Cup キールボートレガッタはディンギーのみでなくキールボートのアジアにおける発展のため創設された。そのフォーマットは以下の通りである。

*主催：アジアセーリング連盟 (ASAF)

*大会運営：開催地の各国連盟 (MNA s)

*開催時期：開催地が (ASAF と協議して) 決める

*開催場所：開催地が決める

*使用艇：20~30 フィートのキールボート

＊レース形式：3～5日の日程でフリートレースを6～11レースを実施する

＊チーム：ASAF・MNA sの代表チームとし、5～6人のクルーで10チーム以上

- ・2016/9/24-10/2にヴェトナムでの開催が予定されていた“第5回アジアビーチゲームズ”のセーリング競技は、ISAF派遣テクニカルディレクター（TD）である大谷たかを様はじめ関係者の努力にもかかわらず、開催国の財政上の問題で開催されないことになった。

（番外編… “日・中・韓” 親善キールボート大会について）

ASAF/ISAF 会議期間中に、見出しのことについて CYA（Zhou Changcheng: Secretary General）、

KSAF（Pil SungLee : Vice President、Victor YUN (Sang-Jun) : International Relations Manager）と JSAF(柴沼)の三者で以下の通りの話し合いを行った。

- （1）この大会を継続すること。
- （2）2016年の大会については、①日本での開催の可否を年内に決める、②日本で開催ができない場合は韓国で開催する。
日程については協議しながら決めていこうということになった。
まずは JSAF キールボート委員会ははじめ関係者にて協議していただき開催の可否を検討して戴きその結果を KSAF と CYA に連絡する。
- （3）2017年は中国・上海で開催する。

3. A S A F 年次総会

- （1）出席： 16カ国（マカオ、台湾含む？）、今回は北朝鮮代表も参加
- （2）主要論点
 - ・ 冒頭、Malav 会長から本 AGM に参加していた ISAF の新 CEO Peter Sowrey に対し、そもそもアジアは国際場裏での代表者が少なく、またレース運営においても RO などの絶対数が少ないのでこの改善は緊要であるとの趣旨の発言。
例えば 2020 年の東京オリンピックでは新たに 20 名の IRO, 20 名の IJ, 20 名の (IM, IU) を実現させたいとの発言があった。
Rodney 副会長からも、RO の試験を英語のみから、各国の母国語でも可とするような要望が表明された。実際、前回のアジア大会（仁川）ではアジア人ではなく、ロシア人、オーストラリア人などが重用されたので、今後は改善したい。
Malav 会長からも先ず 2018 年のインドネシアでの大会がこの試金石になるので、大谷 TD とよく連携したいとの発言があった。

- ・ S F Tについては当方からその趣旨説明を行うとともに、映像の放映を行った。2020年の東京オリンピックをふまえ、日本のこのような企画を多とするとの声が多く参加者から示された。参加者からはS F Tの運営要領などについての質問があった。当方からは、今後ともA S A Fや各国の要望等を良く聞いて実施に当たっていききたいと述べおいた。
- ・ Li Quanhai, ISAF 副会長（アジア選出）から、“I S A FとしてもA S A Fのメンバー拡大に協力する。また、中国はそのために機材の供与やトレーニングを行い、費用負担も行うことをオファーする。具体的にも北朝鮮と話を始めた。また、マカオやカンボジアへの協力も視野に入れている”との発言。
- ・ A S A F事務局からは、シンガポールでA S A F事務局の登記を行い、また財務諸表の作成も順調に行っている。さらにウェブサイトも開設し、順調なヒット数を確保している。ぜひこのサイトを見て欲しい旨の説明があった。財務諸表についての承認もなされた。

4. その他特記事項

- (1) 7日からはI S A F総会のアジェンダが始まり、たまたま “オープン”であった「International Regulations Commission」(Stuart Calthurs 委員長)にオブザーバー参加した(小生としては断片的な参加であったので、これまでの経緯がわからない状況ということもあり、感想の範囲を出ない)。

本 Commission は I M O (国際海事機構) や I S O (国際標準機構) のレギュレーションと I S A F との整合性を語り、またその調整も行うものであった。議論の内容は、ヨットの規格と I S O 規格 (12215 など)、I M O の法的枠組みとヨットとの関連を議論し、調整の方向をとりまとめるものであった。例えば、ヨットの防火基準、ヘルムスマンの視界、燃料タンクの据え付け規格、さらにライフジャケットの規格、トイレの規格、排気ガス基準、ライフラフト (I S O 9650) 規格などについて議論。また、EU Boating Association の基準との整合性、具体的には Invasive Species への配慮、ヨットのリサイクル化が可能になるような方策 (廃棄されたヨットの環境問題)、さらにレーザービームの使用について (原則、法令違反の由なるも実際の海難事故の際には発見される観点では有効の由) なども議論されている。これらは、規則もしくは標準として将来各国にその順守を求めてくる性格のものであり、これらに上流段階で関与しておくことは日本のヨット界にとってもまたヨットの製造業界にとっても重要と思料。

(3) A S A F の着実な成長

A S A F は I S A F と M N A の間に存在しているが、近年は組織の充実を図り、財務報告、ウェブサイトの開設、登記などが着実になされている。また、メンバー国の経済成長に伴い、世界でも成長する地域セーリング連盟となっている。また国際場裏での発言力も増大しているような地合いになってきている（その延長で、A T O などとも考える必要があろう）。今後 J S A F が I S A F で発言力・影響力を行使するのであれば、確実に A S A F のバックアップというものが必要と思料され、それに見合った A S A F との付き合い方や貢献もしていくという方向性になろう。

(4) 中国との関係

豊富な資金力と政府の全面的なバックアップなどを背景に **China Cup** などをはじめとして、アジアで有数の国際レースを実施してきている。また、ヨット製造企業も着実に育ってきており、今回の A S A F の A G M において、C Y A は **ASAF Cup Keel Boat Regatta** 開催の提案を行った。それを受ける形で中国の **FAREAST** 社から、ワン・デザインの 28 R 艇の提供の申し出があり、会場内に当該艇を展示していた。また、同社は O P 艇も生産しており（世界最大の生産会社の由）、アジアにおける O P 普及のために 100 艇以上の提供を申し出ている。

このように C Y A は物理的な貢献については比較優位であるものの、一方技術的な面では日本に一目置いており、日本との連携を模索している。ちなみに、O P のプログラムの紹介パンフレットでは、上記 **FAREAST** 社の創業者が O P を始めた際に、その普及の嚆矢となったのは福岡からの O P 艇の供与がきっかけであったとの美談が紹介されている。

このように、現時点において C Y A の日本に対する信頼は高く、日本との連携を模索している。このような背景下、J S A F としても、成長する中国との連携を強化することは戦略的に緊要かと思料。

(5) 470 級存続へのサポート

470 級が東京以降オリンピック種目としての存続が危ぶまれている現状に関し、タイの代表と話す機会があった。スポーツとしての有為性として 470 級は優れていると思料するも、タイでは普及が充分ではない状況の由。スポーツフットウモローのような枠組みで支援していただけたら有難いと述べていた。丁寧に各国の M N A と協議を重ね、当該国の 470 級へのサポートを通じ、存続に働きかけることは重要と痛感した。

以上